

神戸市立博物館の活動目標と指標 22年度(2010年度)

使命(要点)		「神戸市教育振興基本計画」の4段階評価の基準に準じる																
<p>○多様な神戸文化の特徴と東西文化交流の様相を明らかにし、地域の発展に役立つ「知の拠点」となります。</p> <p>○優れた文化・芸術にふれあう機会を「提供」、新たな調査・研究を「提案」、その成果を「発信」する博物館となります。</p> <p>○市民・利用者が集い、神戸を愛し、誇りとする拠りどころが得られる博物館になります。</p> <p>○震災と復興のなかで得た知見を発信していきます。</p> <p><b>活動指針</b></p> <p>○市民が誇れる博物館 ○すべての人々に親しまれる博物館 ○地域の文化を支える博物館 ○情報発信をする博物館</p>		<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">段階評価の基準について</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>目標が十分達成されている(9割以上)</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>目標がほぼ達成されている(7~8割以上)</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>目標が達成されていない(5割未満)</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td>評価が困難</td> </tr> </tbody> </table>					段階評価の基準について		A	目標が十分達成されている(9割以上)	B	目標がほぼ達成されている(7~8割以上)	C	目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)	D	目標が達成されていない(5割未満)	F	評価が困難
段階評価の基準について																		
A	目標が十分達成されている(9割以上)																	
B	目標がほぼ達成されている(7~8割以上)																	
C	目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)																	
D	目標が達成されていない(5割未満)																	
F	評価が困難																	
活動目標	評価	内部評価																
◎活動内容【目標計画】	評価	活動目標	活動内容◎	戦略方向性	指標□													
○戦略・方向性	評価																	
□指標	評価																	
	参考数値																	
	参照.比較値(過年度実績等)	目標値 a	実績値 b	達成率 b/a	コメント(必要な場合)													
<b>平成22年度自己点検評価 総評</b>																		
<p>平成21年度の自己点検評価では、活動目標ごとの評価がすべてBだったが、今年度においては大型海外展、自主企画展、常設展示ともに充実した内容を提供することができ、それが入館者数や来館者の高い満足度に結びついたことから、「すぐれた芸術・文化に出会える博物館にします」の項目をAの評価とした。</p> <p>博学連携については、例年通り計画以上の実績を積み上げることができた。また学習支援交流員の各種行事への積極的な参加、自主的な活動が進み、生涯学習の場として集える博物館に一步前進した。ただし調査研究活動やデータベースの公開、市民ニーズの把握では、組織的な取り組みや計画性に関し、十分な改善に至っていない点が反省される。</p> <p>なお今年度は、収蔵庫の改修や新たな燻蒸装置の導入、トイレの増設・改修など、予算的な制約により実施できていなかった設備面の改善を図ることができた。</p>																		
地域の歴史情報や未来の指針が得られる博物館にします 文化財を保存・継承していく博物館にします	調査研究への組織的取り組みは依然として十分ではなく、具体的計画と進捗確認をもって進める必要がある。資料収集および資料の保存・保全については、予算及び物理的な制約がある中で、対外的ではあるが改善のための努力が行われている。これらの調査成果や資料の情報公開は、従前どおりには行っているが、館蔵品データベース等現在HPIによる公開に向けた作業を行っているものについて、より計画性をもって進捗を確認して進める必要がある。	B																
◎調査・研究を積極的にを行います	研究課題の設定については、組織的・計画的に取り組みとしてまだ不十分なところがあり、引き続き改善を進める必要がある。		B															
【目標計画】調査研究は収集、保存、展示などの博物館運営の基礎となる欠かせない活動であり、個々人の調査研究とともに、博物館としての組織的な取組についても活性化していく。その成果を諸活動に活かし、発信していく。																		
○調査研究テーマの設定と方針の明示、実績の公開	個々では課題の設定、調査、研究、成果の発信がおこなわれ、また館としても課題の設定が行われたが、計画的な調査活動を全体の取り組みにするには課題が残る。			B														

<input type="checkbox"/> 調査研究テーマの設定	福祥寺(須磨寺)のご協力頂き、10月に現地2日間のべ6人で実施。従前知られていない資料を調査するなどの成果を得たが、他所の調査までには至らなかった。『須磨』に関わる館蔵資料の抽出とリスト化、展覧会テーマ、切り口の提案については、学芸会議で呼びかけたが、フォローが十分でなかったため、リスト化作業に至らなかった。神戸市の関係部局との連携、地域調査にかかる助成制度の調査、年度中におこなった調査の概要の周知を計画していたが実施できなかった。展覧会の開催時期を含め、今後の課題となった。	個々の研究テーマは明確であり、館としての計画的な調査研究が実施されつつあるが、館全体の組織的な取り組みとしては全体の理解と協力を得るための時間と努力が必要と思われる。		C
<input type="checkbox"/> 調査件数	20年度 51ヶ所 21年度 40ヶ所 22年度 39ヶ所	調査箇所数は昨年度とほぼ同数であるが、須磨寺など多人数による調査も1ヶ所としてカウントしているため、一概に増減はいえない。今後のデータの集積に努める。		B
<input type="checkbox"/> 研究成果発信数	20年度 81件 21年度 67件 22年度 68件	ほぼ昨年度なみ、当面は実績値の把握に努める		B
<b>◎地域の歴史に関する情報を発信します</b>	情報発信は様々な機会を通じて計画通り活発に行われた。DBの公開に向けての準備作業も前進している。		A	
<p>【目標 計画】 多様な神戸文化の特徴を調査し、その成果を発信することは当館の重要な使命の一つである。地域に関する資料を収集、整理、保存し、また地域の歴史や地域に残る資料の調査などにあたり、その情報、成果を発信する事業などを恒常的に実施するとともに、有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域と期間を限った調査活動を重点的に実施し、発信する事業にも取り組む。情報発信にあたっては、市民、利用者のニーズにあわせ、様々な媒体を使って積極的に取り組むとともに、成果を市民と共有していく手立てを講じることで、博物館が地域の発展に欠かせない存在になるよう寄与していく</p>				
<input type="checkbox"/> 有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域の歴史を調査し、その情報を発信する事業を展開	展示・講座等の事業や館のツールでの発信は、概ね計画されたとおりに実施されている。			A
<input type="checkbox"/> 自主企画の特別展・企画展の開催	特別展2回、企画展1回、ギャラリー3回	「神戸で秀吉と出会う旅」では、これまで公開機会の少なかった地域の資料を展示することができ、秀吉と神戸のつながり、その意義について認識を深める機会となった。「川西祐三郎」展では、寄贈に伴う調査にもとづいて、版の軌跡をたどり、氏の作品の全貌を見渡した。「ワイドビューの幕末絵師 貞秀」は地域情報の発信を目的に開催したものではなかったが、地域資料も一部取り上げたことから、興味を集めた。またギャラリーの「川西英展」、生誕110年を記念した「別車博覧」「春村ただを」は展示点数は少ないながら、来館者の好評を得た。なお「春村ただを」の作品展は当館でははじめての試みである。		A

<input type="checkbox"/> その他関連事業の開催	<p>地域の歴史に関するこどもむけワークショップとして、こうべ歴史たんけん隊1回を実施した。またミュージアム講座6回のうち3回、博物館を楽しむ3回のうち1回、ジュニアミュージアム講座6回のうち3回、学芸員によるギャラリートーク4回のうち1回、博物館学習支援交流員による夏休みワークショップ6回のうち1回は地域資料に関わる内容で実施した。</p>	<p>各年齢層の方々に関心や理解を深めていただくために、特別展や企画展の趣旨や内容に応じて、各種事業を地域の歴史と関連させて開催することができた。学習支援交流員による夏休みのこどもむけワークショップにおいても地域の歴史に関する内容のものを実施することができた。</p>			A
<input type="checkbox"/> 地域資料の展示	<p>関連点数:企画展「神戸で秀吉に出会う旅」約60点、特別展「川西祐三郎展」約70点など。</p>	<p>「神戸で秀吉と出会う旅」では、重要文化財をはじめ、神戸市や兵庫県指定の文化財を公開することができた。また、「川西祐三郎展」をはじめ、一連のギャラリーでの展示では、昭和期の神戸の景観を紹介することができた。</p>			A
<input type="checkbox"/> 新聞雑誌や講演会での情報発信数	<p>館としては図録4種類(重版含む)、紀要4本、だより2本のほかに、新聞記事(展覧会、ミュージアム講座)など館外での発信をふくめ29件(20年度33件21年度27件)。</p>	<p>昨年度に比べやや増加しているが、過年度のデータが十分でなく、まだ当分は実績値の把握に努める。</p>			B
<input type="checkbox"/> 地域史に関する対応件数	<p>特別利用740件のうち地域史関係は143件、また特別利用ではないが、種々対応しているものとして16件(20年度207件、21年度特別利用749のうち143件、15件)</p>	<p>昨年度に比べすこし増加しているが、当面は実績値の把握に努める</p>			B
<input type="checkbox"/> 関連資料のDBの構築	<p>準備は概ね計画通り進められており、DB構築に向けての具体的な検討をおこなう必要がある</p>				F
<input type="checkbox"/> DBの利用数	<p>21年度に入力した絵葉書資料などの景観画像(1955件)については、データベース上の文字情報と関連付けが完了。池長孟関連資料(1577件)、小曾根家資料(312件)についてはデータベースとの関連付け作業を現在実施中。22年度の新規入力分は古地図資料のカラーもしくはモノクロ画像の総入力を実施。</p>	<p>日本の公立館(国立館を除く)収蔵品情報の大規模なWeb公開は未だに例のない事業であるため、その目的・内容・手法を熟考する必要がある。23年度は引き続き入力作業を続行するとともに、公開用データベースの評価版完成を目指す。</p>			F
<p>◎「東西文化交流」と神戸の歴史に関わる文化財を継続的に収集します</p>		<p>22年度は重要な資料の、時宜を得た収集が行われた。資料購入を含め、今後も継続的に収集できるように努める。</p>			A

【目標 計画】神戸の地域関連、あるいは東西文化交流に関わる資料について、その散逸を防ぎ、可能な限り収集するのは、博物館の重要な機能のひとつである。価値の高い資料を分野に偏ることなく収集することが求められる。

○特色ある館藏品等の充実、収集方針の明示と実績の公開	収集の方針に沿った資料収集がおこなわれ、適宜展示などに生かされている。とくに重要な資料が長年の活動の成果によって寄贈と購入の両方でタイムリーに収集出来た意義は大きい。		A
□資料収集数(購入)	19年度:2件7点3,335千円、20年度:0件0点0円、21年度:2件2点369千円、22年度:9件11点40,549.48千円	件数は多くないが、美術、古地図、歴史の各分野において、館の収集方針に沿った資料・作品の購入ができた。	A
□資料収集数(寄贈)	19年度43件647点総評価額16,973,600円、20年度:4件38点総評価額20,113千円、21年度:43件369点総評価額3,916千円、22年度12件5076点・総評価額40,090.9千円	川西祐三郎氏は父・英氏とともに神戸を代表する版画家であり、近代から現代に至る市域の景観を美術作品として数多く残している。館ですでに英氏の作品群を収蔵しているが、これと併せて祐三郎氏の作品群が一括して寄贈されたことで、市域の歴史的変遷を美術作品を通じて追うことが可能となる。また播磨国美囊郡下渡瀬村庄屋石田家文書、摂津国有馬郡田尾寺村田中家文書の2件は寄託からの移行であるが、これは所蔵者との間にこれまで築いてきた信頼関係により実現したものであり、この寄贈の持つ意義は大きい。	A
□資料収集数(寄託)	19年度:2箇所2,125点、20・21・22年度の受け入れは0件。	22年度は新たな寄託申出はなかったが、寄贈の欄にも記したように、寄託から寄贈への移行が2件あった。ただし既に寄託されている資料の内容や活用状況、預かり資料について、情報のデータ化は進めたが全データの入力完了していない。データ入力と情報の共有が次年度の課題。	B
◎社会的資産としての文化財(館藏品)を保全し、後世に伝えます	懸案であった収蔵環境などの設備改善が大幅に図られた。今後、良好な収蔵環境の維持、資料の計画的な補修などの課題に取り組むとともに、震災と復興の中で得た知見などをこれまで以上に発信していく必要がある。		B
【目標 計画】収蔵資料の永年保存は他の公共施設と一線を画する博物館の中核機能である。しかし、博物館に収蔵されている資料も、ひとたび注意を怠れば、重大な破損・滅失の危機に直面する。化学的殺虫殺菌処理にたよらない、日常的な監視態勢と迅速適切な処理(IPM)が、博物館・美術館業界の資料永年保存の標準となっている昨今において、その完全な遂行は博物館の重大な使命として位置づけられる。			
○方針の明示 ○良好な収蔵環境の整備	4階収蔵庫の設備改修が初めて行われ、良好な収蔵環境のための条件が整い、またくん蒸設備の更新が図られたが、環境の維持など今後の課題も少なくない。		B

<input type="checkbox"/> 収蔵(保存)環境の調査・整備(IPM)	<p>収蔵庫10・11について、不透質板・調湿ボードの設置及び収蔵庫内のダクト整備工事により、調湿性・機密性を高めた。収蔵庫温湿度測定(毎週×3ヶ所)、夏季の生物環境調査(7月・9月)、収蔵庫定期清掃(4回)は計画どおり実施。虫類モニタリングも収蔵庫の工事期間中を除き実施した。</p>	<p>4階収蔵庫の改修工事を実施、収蔵環境を大きく改善することができた。また、燻蒸施設についても改修工事を実施し、窒素燻蒸機を設置した。 4階収蔵庫の温湿度管理、特に空調機設備の改修、収蔵庫内の収納方法や収納量の適正化については今後の課題である。また、展示室、地階の収蔵庫、写真室などの環境整備を計画的に実施する必要がある。</p>		B			
<input type="checkbox"/> 資料の保全	<p>緊急度等の高いものから計画的に進められているが、予算など依然として課題は多い。</p>			B			
<input type="checkbox"/> 資料の補修	<p>20年度:169点 21年度:315点 22年度:35点</p>	<p>限られた予算のなかで、緊急度の高い資料を選び、実施することができた。高額な補修費を必要とする資料のリストについては、作成することができなかった。</p>		B			
<input type="checkbox"/> 大震災による被災の教訓と復旧・復興の記録の公開	<p>HPの大震災コーナーは堅実な利用実績がある。東日本大震災以降、増加した問い合わせなどへの対応も行っており、必要な発信が適宜行われている。</p>			A			
<input type="checkbox"/> 大震災の記録の利用	<p>HP「大震災」コーナーのアクセス件数 16年度:11717件、17年度:10683件、18年度:12857件、19年度:13272件、20年度:11778件、21年度14045(但し2月末まで)、22年度:9747件</p>	<p>年度としては昨年より減少しているが、3月に限ってみれば、東日本大震災以降、アクセス数が増加した。文化庁対応など、保存している阪神大震災における記録が有用であることを示している。</p>		A			
<input checked="" type="checkbox"/> 館蔵品に関する情報開示の整備をおこないます	<p>印刷物での情報公開は計画通り行われ、特別利用も例年並みの実績であるが、HPでの名品公開の追加、DBでの情報公開ははまだ準備段階であり、公開の在り方を含め、実施段階での問題点などを整理し、具体化していく必要がある。</p>		B				
<p>【目標 計画】博物館の所蔵品は神戸市民、そして本市の歴史文化と東西文化交流に関心を寄せる全ての人々の共有財産であるとする観点から、その情報を可能な限り公開することが望まれる。特にインターネットを媒体にしたデータベース公開の実現を目指すべきである。</p>							
<input type="checkbox"/> 館蔵品情報目録の継続的な発信発行	<p>目録など印刷物での情報公開は計画通りに行われ、特別利用も十分に活用されている。</p>			A			
<input type="checkbox"/> 館蔵品目録の継続発行	<p>美術の部・歴史の部各1冊を刊行</p>	<p>美術の部・歴史の部各1冊を刊行</p>	<p>美術の部・歴史の部各1冊を刊行</p>	<p>100%</p>	<p>『美術の部27長崎版画』、『考古・歴史の部27浜本陣絵屋(鷹見)右近右衛門家文書』を23年3月に刊行した。</p>		A

□館蔵品の特別利用数	20年度:709件 22年度:705件	21年度:714件	714件(前年度実績)	705件	99%	本年度も、出版社やテレビ番組制作会社、研究者、学生、一般市民の利用に精力的に対応した。なかでも、NHK大河ドラマ「龍馬伝」に関わる利用は、館蔵資料や歴史内容に関するレファレンスと合わせて、丁寧な対応ができたと思う。しかし、全体として、時間的余裕のない申請も後を絶たず、苦慮した。	A
□ホームページへの掲載	拡張版名品撰の作成と公開		150	0%	0%	23年度前半までに230点以上の資料を収録した名品撰を作成、公開を目指して、現在画像再入力と原稿更新作業中	F
○博物館資料DBの構築	DBの公開はまだ出来ていないが、そのための準備作業は着実に進捗している。						F
□データベースのアクセス件数	21年度に入力した絵葉書資料などの景観画像(1955件)については、データベース上の文字情報と関連付けが完了。池長孟関連資料(1577件)、小曾根家資料(312件)についてはデータベースとの関連付け作業を現在実施中。22年度の新規入力分は古地図資料のカラーもしくはモノクロ画像の総入力を実施。						F
すぐれた芸術・文化に出会える博物館にします	トリノ・エジプト展で上質のエジプト美術、ボストン美術館所蔵浮世絵展では最高品質の黄金期の浮世絵、大英博物館・古代ギリシャ展ではギリシャ彫刻の名品と、バランスよく最上の芸術を展覧したことは意義深い。また川西祐三郎、歌川貞秀、ギャラリーの展覧会は、館蔵品の魅力を来館者の視点で最大限引き出した。常設展示は制約の中で陳列替を行った。						A
◎楽しく学べる魅力的な常設展示を行ないます	新収資料の時宜にかなった展示などの創意工夫で、展示の活性化が図られ、展示解説でも実施率、利用者数ともに増加している。魅力的な常設展示にするための取り組みは着実に実施されている。設備・施設のリニューアルにむけた中期的な取り組みが課題である。						B

【目標 計画】常設展示(ギャラリーを含む)は館の特色を最も発揮し、展示活動の基本となるところである。日常的な取り組みの活性化を図るとともに、学習室を除いて大幅なリニューアルが行われていない現状を踏まえ、将来に向けた準備も行っていく必要がある

○常設展示の内容の更新・拡充・整備	展示資料の入れ替え、展示方法やテーマの更新、寄贈資料の時宜にかなった展示など、魅力ある展示になるよう工夫が行われ、また展示解説においても参加人数の増加などに努力の結果があらわれている。課題として、展示設備や施設のリニューアルについての検討がある。				B		
□展示替え	展示替の回数 20年度:26回、21年度:32回、22年度:34回	必ずしも年度当初の計画通りに行われたわけではないが、むしろ積極的に新収蔵資料を展示するなど、実情にあった形で実施することができた。なかでも寄贈資料の展示は、寄贈者とその関係者に大変喜ばれ、また一般の来館者にも好評を博した。				B	
□常設展示内容	資料を展示する際には、関連資料を合わせて展示したり、説明文を読みやすくするなど、各自工夫を重ねた。学校団体向けに、イラストと簡単な説明を入れた小パネルを、まず「交通の発達」の部屋に設置した。		資料をより身近に感じてもらうために、各自工夫しながら展示を行った。来館者から、好評をいただいた展示もある。				B
□展示解説開催数	平成21年度: 実施日数84日、参加者数194人、平均3.5人 平成22年度: 実施日数84日、参加者数873人、平均11人。	特別展を開催していない 期間毎日実施	参加者数873人、平均11人、参加者のいない日数5日	94%	昨年度と比較すると、参加者数は4.5倍、達成率も1.4倍に増加。神戸市内外の方々に、神戸の歴史や当館のコレクションなどについて、より理解を深めていただくことができた。		A
□展示設備・施設の改修	本年度は、11月にギャラリー壁面のクロスの張替えを実施した。また、1階常設展示室の床面の痛みのある部分の大理石を張り替える作業を行った。		本年度は、ギャラリーの壁面のクロスを張り替えることができ、作品をより効果的に展示することができた。				B
◎特色ある館蔵品を活かした展示を行います	寄贈品・館蔵品中心の特別展で高い満足度を得、図録が完売した。コレクションが有効に活用され、工夫のある展示で市民の満足度も高く、収支面でも問題の少ない好個の実施例であり、自主企画展の開催例の一パターンを示している。						A

【目標計画】特色あるコレクション、調査研究の成果を生かした展示は博物館の基本となる活動であり、館の力量が問われるところである。常設展示(ギャラリーを含む)以外に、南蛮紅毛美術、古地図などの企画展、調査研究にもとづいた自主企画の特別展をそれぞれ少なくとも年間1回は開催し、魅力を発信する

<p>○調査研究に基づく自主企画の特別展・企画展の開催 ○南蛮・古地図の企画展の開催</p>	<p>特別展では、資料整理に数年の準備をし、またコレクションを活用して計画どおり開催できている。企画展でもテーマを定めほぼ計画通り実施された。広報等の制約で、展覧会の魅力を十分に発信できていないなどの問題がある。</p>	<p>A</p>
<p>□展覧会開催</p>	<p>22年度自主企画特別展、企画展：平成22年6月19日～8月1日・南蛮美術企画展「美術のなかの交易」・企画展「神戸で秀吉に出会う旅」平成22年12月11日～2月13日 ・特別展「受贈記念 川西祐三郎展」・ギャラリー「川西英作品展」平成22年12月11日～平成23年2月13日 ・古地図企画展「江戸時代の日本図・中国図」・特別展「ワイドビューの幕末絵師 貞秀」</p> <p>今年度は自主企画の特別展、企画展ともに、当館が所蔵する特色あるコレクションと調査研究成果を活かした当館の特色・独自性のある展覧会となった。</p>	<p>A</p>
<p>□入館者数</p>	<p>平成21年度実施の自主企画特別展「東アジアから神戸へ 海の回廊 一古代・中世の交流と美」 目標値11,400人 実績値10,704人 達成率93% (平成21年度)</p> <p>川西祐三郎展 14,545人 ワイドビューの幕末絵師 貞秀 14,000人 ※企画展は目標入館者数の設定なし</p> <p>川西祐三郎展 13,565人、ワイドビューの幕末絵師 貞秀 9,965人、美術のなかの交易・神戸で秀吉に出会う旅 8,195人、江戸時代の日本図・中国図 9,965人(貞秀展と同時開催)</p> <p>川西祐三郎展 93% ワイドビューの幕末絵師 貞秀 71%</p> <p>入館者増を目指し、展覧会の内容、広報などを吟味する。</p>	<p>A</p>
<p>□満足度</p>	<p>20年度コレクションの精華は78、モダニズム展は85、21年度「夏休み親子はくぶつかん」は81、3月3企画展(銅版画他)は85、「海の回廊」は76。</p> <p>6月企画展は80、川西祐三郎は88、貞秀は85。展覧会全体の満足度測定は迅速に行なえる環境が整った。その結果を迅速に共有できる態勢を整えたい。</p>	<p>B</p>
<p>◎海外展などの特別展を開催します</p>	<p>大型海外展は、海外にある著名作品を市民に公開できる機会であり、神戸市を活性化させるイベントでもある。今後とも博物館活動の中心として、バラエティに富んだ企画を考え、マスコミはじめ広く広報手段を駆使して実施してゆかねばならない。</p>	<p>A</p>



<p>【目標 計画】博物館は人々がすぐれた文化財と対話できる場でなければならない。国内外の博物館施設、または新聞社等のマスメディアと共同し、質の高い大型展を年に1～2回の頻度で開催する。そのための財源確保、広報計画など広範囲な業務を事前の計画の下、実施する。</p>							
○国内外のすぐれた資料、作品を展覧会で紹介	<p>大型海外展を実施することによって、エジプトやギリシャの文明に触れる機会をつくり、また海外に流出した浮世絵の名品を里帰りさせることができた。入場者数、収支とも予想に近いまたはそれを超える値がでたが、将来のためその要因を考察すべきと思われる。</p>					A	
□特別展開催	<p>特別展トリノ・エジプト展(3月20日～5月30日)開催・特別展ポストン美術館浮世絵名品展(8月14日～9月26日)・特別展大英博物館古代ギリシャ展(3月12日～6月12日)</p>	<p>海外展2本と国内の作品による特別展を2本開催した。いずれも文化財の優品・名品をそろえた展示となり、観覧者への要求に応えることができた。</p>				A	
□入館者数	<p>平成21年度 まぼろしの薩摩切子 62,852人 シアトル美術館展 43,608人</p>	<p>トリノ・エジプト展: 195,000人(平成22・23年度総予定入館者数) ポストン美術館浮世絵名品展:75,000人 古代ギリシャ展: 180,000人(平成23年6日までの総予定入館</p>	<p>トリノ・エジプト展 190,733人 ポストン美術館浮世絵名品展 68,032人 古代ギリシャ展 18,995人(2011年3月31日までの入館者数)</p>	<p>トリノ・エジプト展 98% ポストン美術館浮世絵名品展 77% 古代ギリシャ展 50% (2011年3月31日まで)</p>		B	
□満足度	<p>20年度のルーヴル美術館展は80、コロー展は82。21年度の切子展は82、シアトル展は81、</p>	<p>トリノ展、ポストン浮世絵展は81。展覧会全体の満足度測定は迅速に行なえる環境が整った。その結果を迅速に共有できる態勢を整えたい。</p>				A	
芸術・文化を介して、利用者が広く交流できる博物館にします	<p>学校連携については、計画どおり若しくはそれ以上の実績が得られている。今後も引き続き学校連携の強化につとめ、さらに指導主事のみならず学芸員が積極的に関与して質的向上を図って行く必要がある。アンケートを基本とした「市民ニーズの把握」については、これまでも課題とされていた結果分析とそれに基づく改善、活用が十分とは言えない。引き続きアンケート結果の分析とその活用方法の確立を行う必要がある。</p>				B		
◎学校との連携を図ります	<p>博物館の求められる役割の一つとして、博学連携は十分に実施できている。ただ学芸員がそれに十分答えられているかどうかについては、若干の疑問がある。次年度以降の課題として取り組みたい。</p>				A		
<p>【目標 計画】博物館が所蔵している特色ある資料をもとにした教材の開発や展覧会独自のワークショップ等を行い、来館者への機会の提供かつ出張授業等に積極的に取り組むことが博学連携の在り方としては不可欠となっている。将来に向けても学校と連携を図り利用の場としてあるように、プログラムの蓄積と整備を計画・実施していく必要がある</p>							
○学校との連携	<p>学校との連携については十分に図れている。次年度以降も継続し、新たな博物館サポーターを生み出すことが望まれる。</p>				A		

<input type="checkbox"/> 小・中・高等学校の受入数	幼稚園(17)2(18)6(19)1(20)6(21)1(22)1、 小学校(17)42(18)54(19)52(20)60(21)52 (22)52、中学校 (17)47(18)66(19)91(20)84(21)57(22) 83、高等学校 (17)22(18)33(19)54(20)32(21)20(22) 44、その他(大学・専修学校など) (17)13(18)14(19)26(20)43(21)23(22) 55、合計 (17)126(18)181(19)236(20)225(21)153 (22)235、校園、	学校の要望等に沿ったかたちで、来館への対応(幼稚園1、小学校52、中学校83、高校44、その他55計235校園9547人)、オリエンテーション(来館校園のうち28.2%)、またトライやる(13校30人)の受入など、適切な受入が図られている。	A
<input type="checkbox"/> 連携数(出張授業等のアウトリーチ数、教材の貸出数)	(17)幼1小19中14高1計35(18)幼2小35中12 高1計50(19)幼2小54中18高2計76(20)幼1 小44中9高0計54(21)幼0小64中10高2 計76(22)保1小87中14高2大1計105、過去6年 間の平均幼・保1.16小50.5中12.8高1.3計66 平成20年度より過去3年間の平均6.3回252.3	例年よりも連携授業数は多かった。また可能な限りでの広報活動や学芸員と指導主事の体制づくりを進めることができた。保育園1、小学校87、中学校14、高等学校2、大学1、合計105校	A
<input type="checkbox"/> 教員研修の受け入れ	人。平成21年度より教師の研修制度が変更されたため、①教職員社会体験研修:神戸市立本山南中学校・玉津中学校・こうべ小学校・尼崎市立武庫庄小学校(4校延べ7日)、②7月14日小学校社会科研究会20名、③8年目研修16名。22年度は①神小研図工部・神中研美術部研修42名、②高校地歴公民部総会9名、③中学校教育課程研究協議会(社会科)小学校社会科研究会102名、④8年目研修47名、⑤教職員社会体験研修(こうべ小学校)1校1日	今年度も、8年目研修・教師職業体験研修など、実態に即した研修の受け入れを行うことができた。	A
<input type="checkbox"/> 大学との連携事業数	16年度:22校38名 17年度:20校37名 18年度:29校42名 20年度:23校39名 21年度:20校34名 22年度:20校28名 (※21年度までは3班実施) ほか見学実習は7校103名で実施。	今年度より、文部科学省「博物館実習ガイドライン」にしたがって、博物館実習要項および申込様式をホームページにて公開し、実習希望者に対して情報が届くように改善した。また、今年度より必要な経費について実習費を徴収。博物館行事などの調整によって、15名×2班の実習とした。	B
<input type="checkbox"/> 教育普及プログラムの確立	順次、教育プログラムが整備されており、来館者や連携授業の場に活かして望ましい状態にある。今後は、諸機関との連携も含めてのプログラム開発も併せて図ることも一つの手法であろう。	A	

□教育普及プログラム数・内容更新	「南蛮屏風」連携授業：小学校7校、中学校3校、高等学校1校。来館：小学校1校	予定通り制作し、連携授業や学校団体来館時に活用することができた。		A
□子ども向け事業の展開	子ども向けチラシやホームページ・広報紙KOBE上での広報活動	定例的な事業については例年どおり円滑に実施されている。展覧会に付帯する臨時の事業については、より一層周知を図り、事業に努めることが肝要である。今年度も、ホームページ・広報紙KOBE上での広報活動を行うことができた。一方で、市内小中学生の人数分のチラシの配布は予算の都合上5月配布のみとなったため、掲載されていない9月以降のイベントにおいて応募数が伸びなかった。今後チラシの発行回数を増やすなどの工夫が必要と思われる。		B
◎地域との連携を図ります		大阪に比較し神戸の商業施設の衰退がいわれているが、博物館はその立地する地域と不可分の関係であることを認識し、三宮・元町地域の商業施設、ホテル等といっそうの連携を強める必要がある。	A	
【目標 計画】博物館はその立地する地域と不可分の存在である。博物館は地元の文化財のみならず、生活する人々とその活動すべてに関わりをもたねばならない。博物館はその事業を計画・実施する際に地域の学校や社会教育施設、文化団体、商業施設やマスコミなどと連携を重視しなければならない				
○居留地協議会、周辺商店街等との連携	前年度よりさらに共催相手、協力相手を獲得しており評価できる。展覧会にかかわらず恒久的な関係を維持できるよう努めなければならない。		A	
□連携数など	①吊り広告(センター街)、②半券による相互割引(神戸大丸ミュージアム、木下サーカス)、③大丸食堂街の店舗で特典、④「南京街のガイドマップ」設置、⑤「I LOVE KOBE福袋実行委員会」に協力、⑥「古代ギリシャ展」：そごう神戸店と協力(展覧会案内の配布、懸垂幕広告)、⑦大丸と相互連携(ポスター掲示、ちらし配付など)、⑧旧居留地連絡協議会での広報。⑨「神戸旧居留地25番館」の館内案内図製作協力。	年度当初に予想していた以上に地域との連携がとれた。次年度も連携が継続・拡大するように努力したい。		A
□共催事業など	①「居留地シネマ」、②「神戸・阪神歴史講座第一回」、「神戸・阪神歴史講座第三回」、③企画展「神戸で秀吉に出会う旅」では有馬の「太閤の湯殿館」とタイアップ。⑤「神戸で秀吉に出会う旅」における文化財課との連携(見学会・説明会の実施)、⑥兵庫県生活文化大学(県芸術文化協会)の「美術展鑑賞講座」に協力。⑦神戸大学の「地域歴史文化育成支援拠点の整備」プロジェクト事業への協力。	年度当初に予想していた以上に共催事業ができた。大型特別展開催時の大丸との協力関係は次年度も持続していきたい。また、そごうとの連携も考えたい。文化財課とも共催できることがあれば、連携したい。		A

○生涯学習の支援	依頼については十分対応できている。今後、地域での生涯学習に対する支援の充実という観点から、館としての戦略を検討する必要があるだろう。				B
□連携数(出前講座・講師派遣など連携事業数)	20年度 25件 21年度 15件 22年度 25件	地域からの連携の依頼は、日時の調整をして対応している。22年度は、昨年に比べ増加しているが、過年度のデータが不備のため、実態の把握に努め、より有効な連携の在り方を検討する必要がある。			B
◎他の博物館・美術館との連携を図ります	資料や学芸員の相互連携は充分なしえた。今後さらに外国を含めた他館との連携、協力体制を築いてゆかねばならない。				A
【目標 計画】博物館は単独では存続し得ず、常に同じ博物館相当施設と連絡と協力をしなければならない。それは日本国内のみならず広く世界的な範囲で交流すべきで、そのためには館を支える学芸員の切磋琢磨とそれを支える体制作りが必要である。					
○他の博物館・美術館等との情報交換、連携事業の展開	海外を含め展覧会での共催、作品の貸借、講師派遣などは、例年どおり活発におこなえた。今後とも他館・他組織との連携に応えられるよう努めなければならない。				A
□他館での館蔵資料の発信	20年度:24件 241点 256点	21年度:33件 22年度:36件 231点	館内での展示と調整しながら、他館の依頼に充分応えて資料を公開している。他館による別の視点での調査・展示は、博物館資料の新しい価値を生み出す場合もみられる。		A
□他館での委員、講師など	他館での評価委員、講師、他都市審議会委員など 20年度 22件 21年度 15件 22年度 17件		昨年度とほぼ同程度である。当館内での業務だけでなく、他館・他機関での専門性を活かした活動について、依頼に応えている。		A
□他館との共催事業	①兵庫県立美術館の特別展「写真家中山岩太展」&「レトロ・モダン 神戸」に協力。②企画展「神戸で秀吉に出会う旅」で文化財課と協力(見学会・説明会の実施)、③「ボストン美術館浮世絵名品展」における開催各館の連携(図録の分担執筆等)、④アートホール神戸での「別荘博覧展」に協力。⑤タイのバンコク国立博物館での「日本とタイ一ふたつの国の巧みと美」展への出品と学芸員の派遣、⑥県博物館協会に加盟、⑦阪神間美術館博物館連絡協議会に加盟、⑧歴史街道推進協議会に協力、⑨「神戸アートウォーク2010」に参加。⑩せとうち美術館ネットワークに本年度より加盟。		年度当初に予想していた以上に共催・協力関係が結べた。次年度も文化財課をはじめ、他団体より協力要請があれば、積極的に対応していきたい。ただし相手のある事なので、当館だけの考えでは進められない。		A
◎各種講座を一層充実します	徐々にではあるが、各種講座やギャラリートークと取組がなされている。ただ、充実の方向性については、今後とも検討を加え、開発する方向性に向け模索する必要がある。				B
【目標 計画】生涯学習の場として、博物館は社会教育施設のなかでも欠かせない存在である。来館者に対して講座等を積極的に行うことで、展覧会理解、館蔵資料、各自の研究成果を発信し、博物館の魅力を伝えていく					

○講座内容の開発、充実	例年どおり事業が実施できている点については評価できる。また展覧会に関わるギャラリートークや講演会も順次行われ、望ましい姿にある。ただし従来よりの課題である講座内容の充実、開発が図れていない。				B	
□事業数	たのしむ講座(22名) ミュージアム講座(参加者137名、講座受講総数691名)	博物館の所蔵品や企画展、特別展にちなんだ講座を開催し、好評であった。			A	
□参加者数	ミュージアム講座 平成17～21年度の受講者数平均110.1名 たのしむ講座 平成15～19年:平均11.6人 平成20年度:20名 平成21年度:11名	ミュージアム講座:150名 たのしむ講座:20名	ミュージアム講座(申込147名参加137名、受講総数691名)たのしむ講座(12名)	83%	本年度よりミントクラブの協力により、HPなどでの広報展開が図られ、新たな受講者を得られた。	A
○利用者ニーズの把握	アンケートの調査は実施しているが、昨年度も指摘したように検討がなされていない。当然、反映はない。				B	
□利用者満足度	「博物館をたのしむ」「ミュージアム講座」のアンケートを実施各講座最終回においてアンケート調査。	受講者のアンケート結果は概ね好評であった			B	
◎広報活動を充実し、各種事業を広く紹介します	ホームページ更新手続きが簡便になり、それに伴い迅速にかついろいろな情報提供ができています。今後は携帯メールやツイッターなどより簡便なアクセス方法の開拓に努めてゆかねばならない。				A	
【目標計画】博物館の基本活動は文化財の収集と保存、活用である。それらの活動は今に生きる人々に理解されることによって、いっそうの発展を遂げることができる。そのためには、展覧会広報のみならず、博物館活動すべてをあらゆる媒体を通じて知らしめる必要がある。						
○広報活動の充実	大型特別展では広報事務局を通じて、その他の企画展では予算の少ない中で広報に努めた。今後も無料広告の開拓に努め、迅速かつ正確に広報しなければならない。				A	
□広報掲載件数	平成20年度総計300件。平成21年度(総計508件)で、前年度より増加した。	これからも積極的な情報発信に努めたい。			A	
○HPの更新	ホームページ更新手続きが簡便になり、より迅速に情報提供できるようになった。今後とも更新頻度を高めるとともに、魅力ある画像やデータを提供してゆかねばならない。				A	
□HPの更新回数、ページ数、アクセス数	これまで遅延なく提供してきた。アクセス数:20年度413220、21年度:297000、22年度:400,384	特に出品目録のPDFは印刷物のスキャンコピーではなく、ワードなどの文書データからおこしたものを提供しよう、広報課からの指導がある。今後は、この点に留意してより迅速な処理を目指す。			A	

○メール会員向けの新たな情報発信事業の開発	22年度に議論・検討した結果、当面は導入を行わないこととした。			F
□メール会員への発信数、メール会員数	22年度に議論・検討した結果、当面は導入を行わないこととした。			F
◎市民ニーズを把握し、必要な改善を行いません	現状のアンケート調査の活用と、さらなる調査方法を検討することが必要。またその結果を公開する方法についても職員間で検討が必要である。			C
【目標 計画】博物館は地域とそこに生活する人々のために存続しなければならない。文化財の保存とそれを利用した諸活動は相互に補完しあわなければならないが、さらにそれらは市民のニーズに応えるものであることが理想であり目指す目標といえよう。市民ニーズの把握のためのツールを持つことと、その分析、さらにはその活用を図らねばならない				
○定期的な利用者へのアンケート調査 ○非来館者を含めた意識調査	アンケート調査については、すべての展覧会で回収箱を設置し投げ入れ式で、また各講座では参加者全員にその場でほぼ対面形式で実施した。アンケートは回収後ただちに回覧し、そこに記された意見については迅速に対応できた。集計作業も学習交流員の力により前年度よりもスムーズに行われた。次の段階として、その集計データをどのように分析し館活動に役立てるか、またそれをHPなどでどう公開してゆかかを職員間で検討しなければならない。			C
□アンケート調査に基づくニーズ・満足度の把握	アンケートの回覧は、展覧会担当者を優先して、収集後その日のうちに回覧した結果、展覧会担当者にはすばやく問題点が伝わり、迅速な対応・改善が可能となった。ただし、満足度の迅速な把握については特に工夫を行わなかったが、各展覧会の全体満足度だけなら、リアルタイムに集計と把握が可能のようにも思われる。来年度はこれを重点的に取り組みたい。			B
□HPへの掲載・公開	年報の電子化・公開の準備が整えば、これにあわせて公開したい。			F
□アンケート評価への対応と改善	1展覧会に1000枚ちかくの回答を集計・処理するのは多大な時間を要し、1週間以内という目標にはほど遠い。交流員からは、作業効率のためにアンケート用紙・集計用紙の改善案が出されている。真摯にうけとめ、改善していきたい。なお、展覧会全体の満足度については迅速に共有できる見通しがたったので、次年度より態勢を整えたい。			C
◎ボランティア活動を通じて、人々が交流できる場を作ります	前年度に引き続き、各種行事の参画が進み、生涯学習の場として集える博物館となりつつあり、一歩ずつ前進をみせている。博物館職員、学習支援交流員相互の連携を一層図ることが望ましい。			B
【目標 計画】博物館運営のなかで、人々が交流できる場としてボランティアは一つの姿となりつつある。しかし、単に業務の代替を求めるのではなく、独自の運営形態を職員・ボランティア相互で生み出す必要がある。また、活動を円滑に進めるために、ハード・ソフト両面において整備を図る				
○ボランティア活動の実施	夏季休業期間中や展覧会に即したワークショップなどへの体制準備を図っている。体制面については、昨年度も記入したが、一部職員が活動に携わっているにすぎない。館全体としてバックアップしていく姿勢が必要。			B
□実績(人数、回数、内容)	平成21年度のべ227名 平成22年度のべ719名	活動参加者の総延べ人数が700人を越えたことは、交流員が積極的に参加する姿勢が芽生えたことが窺える。積極的な活動を維持し、継続させるための取り組みが必要である。		A
○活動内容の充実	①活動内容のプログラムの充実とは言い難いが、一歩ずつ軌道に乗りつつある。②自主的に内容を創出するよう導くことも重要であろう。			B

<input type="checkbox"/> 活動内容	<p>ツールボックスの開発は、学習支援交流員活動の中で一つの柱となる活動となった。開発のために自主的に検討会を開いた。ツールを制作するだけでなくとどまらず、ワークショップの開催など活用へと繋げることができた。</p>	<p>ツールボックスを開発する過程で、検討会を多く開催し、交流員間で討議する時間を多く取ったことにより、交流員のコミュニケーション力が向上していくことを実感した。このコミュニケーション力によって新たな事業を自ら創出できるような基盤が形成されることが期待できる。</p>			A
<b>すべての人々にやさしい博物館にします</b>	<p>利用者にやさしい博物館を目指してトイレの改修等を進めているが、限られた予算の中で今後も不十分な点を明らかにし改善していく必要がある。</p>		B		
<input checked="" type="checkbox"/> 誰でも利用しやすい施設、設備にします。	<p>多くの入館者から要望のあった、女子トイレの増設と和式から洋式への設備の変更を行った。その結果、2階に男子トイレがなくなったため、男子トイレの要望が今後ある可能性が高い。</p>			B	
<p><b>【目標 計画】</b> これからの博物館は、高齢者・障害者・外国人等誰でも利用しやすい施設・設備にしていく必要がある。そのためにユニバーサルデザインへの対応に向け、リニューアルを含め、施設・設備の総合的な改修案を立案し、具体化していく必要がある。</p>					
<input type="checkbox"/> 施設の計画的な補修、改修	<p>2階トイレを女性用専用に改修し、従来から不満が多かった女性用トイレの増設と洋式化を図った。</p>			B	
<input type="checkbox"/> 省エネルギー・省資源への取り組み	<p>一部のランプをLED電球に代えるとともに、改修したトイレについては、省エネ型で水量の減少を図った。</p>			B	
<input type="checkbox"/> 消防・建築設備等の点検、訓練、安全衛生の確保	<p>博物館の施設維持のため最低限の補修は行っている。</p>				B
<input type="checkbox"/> KEMSの認定	<p>一部改善の指摘を受けたがKEMSの認定を受けた。</p>				A
<input type="checkbox"/> ユニバーサルデザインへの対応	<p>2階トイレの改修にあわせ、和式から洋式に、また、身体障害者用トイレにウォッシュレットを取りつけ、全館のトイレ手洗い用水栓を自動化した。</p>				B
<input type="checkbox"/> ユニバーサルデザイン取組	<p>2階トイレの改修にあわせ、身体障害者用トイレにウォッシュレットを取り付けるとともに、全館のトイレ手洗い用水栓を自動化した。</p>	<p>大掛かりな改修はリニューアル時ということで、トイレのすべての手洗水栓を自動にし、身体障害者用トイレにウォッシュレットを取り付けた。</p>			B
<input checked="" type="checkbox"/> 誰にでも喜ばれるサービスを提供します	<p>アンケート結果をみても、スタッフの対応に不満との意見はごく少数であり、入館者のスタッフへの満足度は高いと考えられる。</p>		B		
<p><b>【目標 計画】</b> これからの博物館は、誰からも喜ばれるサービスを提供し、利用者から高く評価される博物館にしていく必要がある。そのためには、まず、仕事量に見合った職員・スタッフ数の確保、次に、それらの職員の能力を高めるための研修を実施していく必要があるが、まずは、この前提となる予算の確保が急務である。</p>					
<input type="checkbox"/> 人的サービスの充実	<p>仕事量にあわせ最低限のスタッフは配置しており、アンケート結果を見ても、スタッフの対応(人的サービス面)について不満を持っている入館者はごく少数であった。</p>				B

<input type="checkbox"/> 館内の運営協力体制		アンケートの回答を見ると、ほとんどの方が、スタッフの対応は、普通、良い、大変良いに区分されており、問題は生じていない。			B
<input type="checkbox"/> 職員の研修		すべての研修に参加できないが、参加が必要な研修については、必ず参加した。			B
<input type="checkbox"/> 利用者サービス		従来からのアンケートで苦情の多かった女性トイレの増加と洋式トイレへの改造について、今年度実施した。			B
<b>◎予算の充実に努めます</b>	予算が厳しい中、必要な予算を獲得するため、予算編成当局に予算の必要性を分かりやすく説明するとともに、特別展の収入や補助金・助成金などの自己財源の獲得を積極的に行った。				B
<b>【目標 計画】</b> 市の予算は、非常に厳しいものがあり、毎年減少してきている。そのため、博物館に必要な予算を獲得していく努力をこれまで以上にに行うとともに、外部からの支援金・助成金の獲得に向け、積極的に行動していく必要がある。					
<input type="checkbox"/> 予算の充実	予算については、厳しいながら館運営に必要最低限な額を確保している。				B
<input type="checkbox"/> 支援金・助成金の獲得	伊藤文化振興財団より「貞秀展」に50万円、みなと銀行文化振興財団より「川西祐三郎展」に20万円の助成を受けた。また文化庁「地域文化資源と地域人材を活かしたモデル事業」において、2,527,520円の助成を受けた。	全体としては、支援いただく予定のところからは、概ね支援をいただいた。			B
<input type="checkbox"/> 活動指標の内部評価と外部評価の実施	事業の自己評価をできるだけわかりやすい評価基準としている。				B
<input type="checkbox"/> 自己点検、評価システム	自己点検評価だけでなく、外部評価を行うことにより、各事業における課題を改善しようとする意識は高まった。ただし評価にかかる事務手続き、ならびに外部評価のための事務の遅延により、検証を図るまでには至らなかった。また試行より3年が経過し、見直しが必要な点も生じている。次年度以降の課題である。				B